

もゑんにつれてくるくるとまのり、どうろう、がげどうろう、月もふも  
 く夜あらしにまのれくまのよくまのれかざぐるまをぐるまに花見  
 ぐるまよまのびのくるま、くも、夜れくるまよそにぬしゆる袖ひく  
 る、そでのま引ちをさへし、戀をすみれかびしんそう、四さよ色あるつ  
 くり花手をつくしてぞかざりたる、頼光甚興に乗じ、酒寡さなはの折  
 うち、渡邊の綱うそむのさだ光、後前に罷出、誠は此度判官殿の忠節よて、  
 我も迄おんざの段、淺かすいへ共、いつ迄うくもうくとして、もあら  
 れ老、彦大將の誰あらん、忝くも六孫王の孫、攝津守源の頼光、郎等、おの  
 先此渡邊新參のうすむれ定光、一せきに只二人なき共、兩腕は百人づゝ、  
 どうらばねにも百人づゝ、をの取、此座に斗六百騎、何をうり、待ぬ  
 ん、惡道おやかどう、どおほくそ、成道よは入者そくなし、右大將がむせい  
 をうつて平家さうんの世とあらば、正盛四かいを二のみし、万民のなげ

さ遠かるまじ、兩人おいとまのみはつて都れくいをもちかひ、諸國は  
 家人より催しとが、お死む糸を奏問し、佞臣原一に、か死首し、本意と  
 げさせ奉らん、いりよしても此様よあんかんとくらして、筋ほねる  
 んでせいこんつきはてしへば早おいとまをぞすたる、頼光聞召我もさ  
 こを思ひつき、さあふを兩人は伊勢路絶の路へれもひくべし、我は又北  
 國よか、源氏心ざりの勢をたつめ、都九條、六孫王の誕生水あて出合ん、  
 と出と云定光よ、いまだ主従は盃せき、名乗の一字をもちづる上と向後  
 源氏れ家れ子ども、彦盃を下さる、定光まさつて頂戴し、天が下にふた  
 り共ある大將軍を主君よ持、下地は勇力十をいまし、一騎當千と思召れ  
 と三をいつ、いつとほす、能勢は判官座と立て、めでたし、貴  
 殿渡邊殿は武勇あやあり、其盃を一子冠者丸よ下されか、と有  
 べきを、お死も中べなれ共、おうまあやかりのふ為、お望に任せんと

さそ盃を冠者丸いささくうやまふ妹母の見るより打まわれ、袂をかほまをい移て、つゝむ涙も、をのづうちこゑに、あふのれ、色も出入り、是はと移さしきうさめてこそ見へあられ、判官見かね、祝儀の折かゝ、不吉の落涙狂氣しるるか、罷たてと引立る渡邊とやめて、尤も、定光は盃不足に思ひぬること、母の氣は道理至極、あゝの綱を頂戴せん、冠者殿いざさしめへと云々を、母の漸涙をかさへ移ふしんの移とのり、定光殿とゆめくくろしむてもいぬ、我身の運のつゝなさと移の子が果報のうそ死と、日比くよく思ふと思ひ余りて涙がこぼれ、祝儀とさせしぞや、大將は綱殿も移存し定光殿の物語、わふは、始小侍従の局とて、移父満仲公よとやつうへ、源氏れた孫と身もやどし誕生せしとあはれ若美女は前と付ぬひ、はてうあい有しかと頼光様の母、みだいの所の心と憚り、出家もせぬとて十一の春より十三の秋迄、山

へのばせぬひし、經の一字もあはれずさつゝとつゝの弓馬にげい、満仲公は移いさどおりあだめても歎死ても、移よくみはるやらず、藤原は仲光に仰付られ、くびうたるゝに極りし、情有仲光忠義をねんじ我子の幸壽丸とがい、あの子は首とて見せ参らせ、當座は命の助かりしが、終は其と顯を二度にあらんき、立腹、移親子のあんな死をせわふり、所は判官殿に下され、今みづかしの能勢、判官仲國が妻、あの子は一子冠者丸とせ共、もとは満仲公の孫子頼光は弟、美女は前ふておはし、まを、悲し死かあるや同ト源氏れた孫と生をぬふ程ならん、移臺所の移腹もやどりのあへり、然らむ出家は移さすもなく、頼光様は大將軍、あは子の又副將軍と千騎万騎のぐん兵も、まゝがへなび々ぬとんは身の末代に残る源氏といづの巻にさへ、美女は前と云名をうづて入らるす、漸と郷侍すさくわ取の大將といふたひ、共、淺まし共、教あふぬ此女

れとらむらせぬ故、浮出家と仰出さきしが、果報は花のちり始、井手の蛙の蛸は、ちいさき時、ねひを有さるがら、魚れとくよて、母蛙が親ま似ぬ龍をうみ、いと悦べ共、次第ふひをが手足と成常れ、蟄と成故に、なげさくやひと傳へし、がそきの天地ません、の道理、まづからいたま、源氏れ大將をうまれとせし、悦びの夢さきやまめて、平人の子と成ぬも、此母が飛行のつたさ故、どの涙のに、ごま江に、よるひる泣ぬひまもなき蟄まおとり、此身やど、は前も人先も打忘れうつれとふして、泣き色バ、君を始渡邊定光諸共ま皆、袖とぞぬさる、や、有て頼光少侍従のくや、至極あふら子と見ると、父にまかまといへり、満仲の深光、浮心入てそ有つらめ、今右大將正盛、さ逆威にせめ、さ色一頼光が、弟美女は前と有さ、さバかくあんとんに有べ、か判官の子と成し故、先此度れなんをのかれしと、父のまひは、是一、はうんされ上りら、いもど、のとく

出家共あ、めは、判官が子まぬとつて、弓矢の家を立させらる、父のまひは、是二、我世に出ても有あら、バ末を見まや、三、はまひ、親れかたみ、兄弟ぞと打涙ぐみ、ひま色は、判官おや、こわめと斗渡邊も定光も、末頼み有源氏れ光りか、げそへたる燈籠のかけ、又門出の盃や、おいとま、ぬり立雲の明れば、七月十五日な、死玉祭り持佛堂、北のかたいた、ひどり香をたき水だむけ、さ、ぐる花の蓮葉の露の敷、さるき人の、頼燈ほだいと、よ、さ、折から、判官立出同じく、香花奉りまば、さくねん、ま、ゆ、を、い、ま、ふ、小侍従あれ見ぬ、本尊の三世常住の佛葬、ま、ま、ふ、の、う、ま、盆、よ、て、親祖父の聖靈、満仲公のなき玉も、此持佛堂に來らせぬ、ま、尊靈の、浮前よ、て、う、ら、は、詞、にも、虚言あ、く、心、にも、う、ま、あ、し、浮身も、又、偽、り、あ、く、ま、つ、と、く、よ、返、答、あ、く、を、語、る、べ、き、と、有、心、底、聞、ん、と、有、ま、れ、を、今、め、う、し、何、との存せぬ共、常も偽り、ま、あ、こ、そ、と、に、大、七、れ、う、ら、盆、の、年、ま、一、ど、の、お

容れ聖靈佛に前にて露程も、虚言れお返事いたそふか語させのへと仰  
 かる判官うあづき懐中より多一通取出し、是見られよ、頼光是よ座  
 のよし右大將傳を聞急ぎつめ腹さらそるの但ひそかにさし殺せり、首  
 打く出そまをいて、一子冠者丸の由緒有者あれを、源氏の大將と奏問  
 し、取立んとれ多に起請を書そへまさをたり、され共某かゝる非道に組  
 そべきり、頼光をひそかよ落し奉り、右大將よりとがめまあひ、腹切迄  
 と、心にをさめ打なぐつてを死なるが、身きのふれくどきと、たましく  
 満仲の若君をたん生せしかひもあく、平人の判官が子とらうづもる、冠  
 者丸明くれやあく悲しと水よ住、蜷造思ひつゝ、てくやみの躰、母さ  
 る身にての道理之尤也、ひつ死やう此判官が爲に、我子にて子よばら  
 せ、げん世の親との身のと、頼光をうしかひ冠者丸を世お立べきや、後  
 悔のな死様お心のろことまほそぐよ、聞まやしと有なれを小侍従との

とひ絲塞がり、多く返し、巻うへし貌をかふふめまよさき胸お手をくみ  
 さしうのふき、まわん取ささままよままをしひふへもきりし、誠  
 そふまや物なふ判官殿、さへ頼光様を助々落しても、うくまでさ  
 りふる右大將の首を見すして、雲の字らよもよもや助々置べきか時  
 又の冠者丸も世お出す、一もどらせ二もどらせ源氏のためつ此時也、い  
 たは、あがら討奉り冠者を源氏の大將軍、清和にけいづとつぐせんと  
 我身は幸ゆれ子が果報といとせもはてす、皆迄聞に及き、さこそ思ひ  
 て尋しと首うつり、胸の中、用意せんと立所を是なふ、は身の爲に、  
 相傳のお主、世のそり、天のどがめ佛神にありも恐ろし、みづのら  
 が一さちおだましよ切てさし通さん場所、此持佛堂千お一も仕損せ  
 た、こゑをのくるをわいづよの付て首取のへ、いさぎよし然ふを  
 身討きは、次の間に忍びひてこゑ次第よか出ん、必せくまい氣遣なさ

れ亦首尾よふとどかれて「さしき」に立出る跡見送りて、北れた恥かし  
 や男も女もゆゑまむべきの舌三寸、子を思ふ余りの詞み心を見さがさ  
 れ、うさかひうくるも尤詞のいひにけ誠しうらま、所詮は身がのまに冠  
 者丸が首穿つて頼光のひなんとすくひよこしまな心誠は心、此佛こそ  
 證據ぞとてい女は道を守り刀袂の下にをしかくす、數珠も我子よわか  
 きは涙々ふ一日をげんせらひ、まやうじをさつとつけられ冠者丸  
 立出、今日佛事の日どの中あがふ、かさかやまても有者のいひ死て祝ひ  
 日めでさく浮かば見せぬへと、よこやか成と見るよ付母の心もさたる  
 色ど、さあられぬ跡にて、此祝日に、かみをもゆのす取上げ髪何とぞ頼  
 光さまは何かたにまします、さんひつた山はす、み所には入我らもか  
 そ、心に有けるが、殘暑まはきさたく行水いさしかきもとき、まびんに取  
 あげ見ぐるしあらんと、つとどかさなする手つさ手もども今れまは、かさ

見と思へむ糸せまり、物いふこゑもまどろあり、是冠者丸げん世れお  
 やよ置まといは親が先大と、行水せしあそ幸かたびら死かへ身を清光、  
 は経よんで父聖靈は手むけ、わかき身とて、無常は命いつあん時は定め  
 のあし、自他平等のゑよりしや、あつとこたへく冠者丸親れのさぬる死  
 まやう束、其身のそれども白かさびし思ひそめぬぞあまをあり、能勢は  
 判官仲國ハ妻の小侍従頼光を、だましうち討んと、蟻蠅が舞かへつ  
 てははりせよ、うらわらはれては一大事、あら氣づうのしむねやすか  
 少とて佛問は妻戸にうらうらむを、静よお經のこゑ聞ゆすは、是を頼光の  
 心へ、かく心とゆるされしうへ、何とかわらん、物音のそよどもせ  
 を妻戸一重けやぶつと、さしうらちとはいさ本ぬきりたてを、をを  
 だてひのへたり冠者丸の一心ふらんよむ御經は日もさけたり、あげん  
 まいをくま、いと母と刀とするかとぬ死、うしろに立と立たれ共、うま

くろくど色白ふとくまゆれ辨舌くんせつさそやかよ百人よもすくまし生れつ  
 き見るよ目もくれ心さえたちふりわけ手もよほり涙みやみおまよひ  
 しが扱かひいやあうらより此母が死りころまどの露まらき慈現じげん視衆ししゆ  
 生福じやくふく海無量かいむりやうとよひかふびんやる親と殺す子に斗天てん討あさる何と  
 ど我とく子をまろす親にも罰ばつあささくしあふくにそやくまづみな  
 を此世れ思ひのせまい物と太刀ふりわけくと泣まづみきえ入てはま  
 たふりわけこそをも立すかつとどふらうらまとなげし太刀よりもむ  
 ねをきりさく思ひたやひをさきた玉ちるをのりては経もそやくとん  
 ぢくは時刻過るとすつもうたれせせんかたつき判官殿はおのせぬか  
 出合ぬへとよむれをさまつさりどのま戸はやふりどんで入冠者丸  
 もとびまさり互よりはれたつと見合せあはれて詞のあうりしが母と  
 ろくくこそをわけはぬしんは尤やれ冠者丸有大将より頼光と討奉

れおとを源氏に大将とあをがんとの内通判官殿は名の大十郎身をが  
 いして頼光のゆくびと敵をたふらひはなんぎすくひは身も母も末  
 代よ女は道忠孝の名をどま先ん此太刀をいくたびか打つけんく  
 とのまたを共いとしかひいよめもくらまどでも母のあうま色ぬあふ  
 判官殿とやいわけ子をうつてたべこりやうらうへなお主といひも  
 との兄か命おかはるの本望はままそ母かたがいやしうてみれんれ  
 さいをど思らえるな目をふさぎ手と合せまんまやうにうたをてた  
 もどくどきぬへを冠者丸がや色さつとあどく成わちくふるひまな  
 んど我らが此くびうたんとや親ふんあがら判官殿のもど他人頼まよま  
 たるひとまの母なさけあやむむしやかりそめはわづらひまも業よ  
 灸よどのぬひいいつはりか首うたるもどが有共たそくるまを親の  
 まひつをぬい母やおそろしやどにげんとするを母とびかいつて引と

先、ゆさましや口ねしや、詞どがあつてさるゝほどなふを母が此  
 身を、一ふだめしにきさまれくも見とるよとるものか、詞子の命は親の  
 命、たとへば身がおもひ切せてふといふてもすてもない、詞傍身が命の  
 傍身より母が百をいおしけを、それをころす人ぐいは義理といふ  
 字にせめられし、母が心と思ひやれまよもなくとふるすまい、せめて  
 一とんいさぎよく弓とりらし、詞詞を聞せ、とちとすい、いでくれよとて  
 こゑをあげてなけかるゝ、詞判官ゆき笑ひ、是は傍へんの心底のあらとを  
 たり、いさといけるもの命たまぬものや有、其一命と義まよつと捨  
 るを弓取武士と名付、たしむり買入士民といふ、さ様は下郎を傍身が  
 りよとつて何れゑ死ゆらん、此上の頼光のゆらん次第とありけるを、冠  
 者色をなを、有かた死ゆ了簡、命ひとつまろひしと進出ると母とつ  
 て引とへ、とちまをまかといさもふ、詞ふんさも、ふつはりとさめとてたり

あがきとちを見せんより、母が慈悲とといふよとやぐぬ死うちらう  
 つら風よ、さうりとまたぬ小椿や、くびの前になおちにける、むねにせ  
 死くる涙をおさへたふさひつさげあつとよ近付、詞このころつたなく  
 ちく生をうみあぐら、人と思ひてそだて、は面目あくもをづうし、か  
 らるものゝ大將は傍身が、なりとは恐ながら、我よが忠孝は必ざしをた  
 てぬひ、詞傍あさけおは君、詞傍出生の後迄も、此子がさいとは、あはげと必  
 とちをかくしたべ、いふにかひあささいとやと又むせ、くへるぞ道理な  
 り、かゝる所よ外さまはさふらひ六七人とせ来り、詞右大將より傍返事  
 れをしとてのひ度よ、及びひ、急うにうむの返答然るべしとぞす  
 ける、判官少しもさはがせわれ聞ぬ、君は傍なをき、只今も極つて、せん  
 どの用よ、立とはは身誠れ心ざし、弓矢はとやうがまかなひさ、とて  
 ものとよさいと清くせざりしと、詞残念さよ、血はわかきと、か得をせ

の頼光も似さき共、丸ひたひと角ひたひ此ふんよてわたされど、此首  
 に角いれを頼光にまがひあしと、くしげ引よせかみをと元もと結とを  
 心をふさの中、一通れ多とゆひこめ母さま、いる冠者丸と書て有、ふら  
 ぶ隠しんそれやらを扱へりくこれ有けるう、たゞいは何ぞのぞみとでも  
 有けるかど、あくくひひたよとあぐる、ふるも涙ふるづもれて、多のと  
 心をまどろ、松の干とせをさかりとし朝がほの一時きを一期とす、を  
 んじはさき世おさだまる夢何をうつ、とさだむべた、まかれを我等満  
 仲公のふけうをうけ判官殿の子と成十三の春より十六の此秋迄、やし  
 奇ひれやの厚思かうおん申おもとをなく、とさく母のほとんとく七生ひまを  
 かりりても、報じがたなく存るかりふ、我わがびうつて頼光の浮身がひ  
 まどれこゝろざし、物かけより見参ふせのぞむ所と存きども、常と母れ  
 此ふびんおさき風にもあぐられず、浮身まかへくの浮てうわい、其期ま

れぞんではあげきおまづみよもや討めふまじ、まよせん我らかくびや  
 う者これんは跡を見のほは、浮にくくみれいりのやひをほこゝるやす  
 くらちめんど、まざとさるべきひきやき、のさいと、命おしひとおぼすあ  
 よ、西東さいとうおぼへてよりついに一度も浮氣はまがひしこともあく、一生の  
 わかき今のれきと浮はふ立のほかほをせ、見奉ふんのなしさは來世  
 のまよひあるま、さりなまふ君よは忠おやおは孝母れてい女の道たて  
 を、身にをひては愧び三世は諸佛もせうらんおれ、命はさらになしから  
 せ、うなしこの中れりなすべきは、年たくる迄母うへのほねまらりくおき  
 ふして、まよひよりほあけき思ひやらきて、ほとほしく、浮あどりひつ  
 きせせいへ、とらさといひ母の多を身は、つはくびうきよせ、いだき  
 ついでりのとふしこゑと、わけてあだぬふ、思ひ切ふる判官も、つと  
 斗ふ五たいとあげきえん斗ふあけり、る心れ、内こをわのきあれ、母の



涙はひまよりも、人の筋目かとぞういさぞ満仲はぬたねにて有  
 一物此れ心とは露まらせおく病なりと感へて、いやし死母が口おけ  
 いひはぢし先さる勿躰ささ、おそ色がましきやうが赤や中有のさびの  
 汚供して、いひわけせんと太刀取わぐれを判官とさへて、ふりく、  
 身の儘こゝろもうまれば母、我斗のげんさいの主君まを我こそはまぬべれ  
 ど、頼光うくと聞しめさをもながらへんといのぬふまじ、時には此子  
 も大死我まふすふも不忠れ者、敵の使さきりありひそり頼光をねと  
 一参らせひと先此首の、ひたひにちしきれうきそまといさやく天は誠  
 此道、まもれば守る汚佛に後世をまうせて此世より忠義をまかく玉ま  
 つりよどりよ、まぬとらすばの花をくんにたふまを、まぬふつの  
 と一へくらかかぬ人れ、ころど頼もさ

源頼光道行 第四

「あだちりと名にこそさてれさくら花く、ちりてもついでよ新よかへる、  
 みやこのさると、されみても、うき世のふちせつねならぬ、赤がさのゆく  
 ちくみたま色、源は頼光の、まぬぐい、なふらふかなさけまで、命のたれ  
 一とまたまや、よそよもりのまた風、木のまぬまもづく、落人け身とあり  
 のふせんぢやうまぬぢんのかりあらで、めしもならぬむまやわら  
 ぢ、まぬまぬらぬわらぐつに、ぬわーといたまーめ、くさの露ちるかけ  
 またよ、今はう死身をねくうたも、あるこまさぬ、むさどりのちりく  
 わかれおちぬふ、ぬありさままで、ぬきなるまの、お山の、そなるともいさ  
 まらぎくやまぬさうる、まされむまべ道とへを、花まよそへてまらん、  
 一と子供さへ、あぢづるうづらつたかづら、といひるごまて行さきと、  
 せきとめよとせきうのふ、日だうれをまも、打くもりさつとたも、どに  
 一まぐさ、まをしやどかる笠、ぬひのさどとはるかに、見わさせば野わ死

又みだそとぎす、き野もりのか、みうづもれ、うき世れくもふ死  
 とくへいふ死のさとおのきをふく、とまのゆらみてさびきも、あまう  
 ついてのうつくしきまづかわらやあ立けふり、さえてのむすびなび死  
 ての風のまよ、立まよふ、人ぐいの善悪よ、さそのれあびく人心、う  
 くやとばかりく、んすれば、五よく七まやうさま、の、つみとうるま  
 のさと近き、友にもうとくまた、死もふ世の中山やま深く、木は間も  
 る、入わいの、う絲こら、と物そとく、たにのかけとし、とだへして、み  
 ねよつまこふまか、けこゑ子と、うあ、みてましらあ、よのぬる鳥よ  
 るのつる、涙をそふるたねならし、くれ行を、の、風たへて、よもの山も  
 くねんとさせん、のさうをあ、のせを、たにけか、いとま、ん、とねも  
 のがたり、のみのあふみ、國はさういよ世の中の、まやうまや、ひつすいの  
 さかひ、いと、我身よとへ、わわ、こをへい、あにはあ、ぬいあ、やま、あ、と

に見あしていつりま、世もあを、野がとらあ、らを、今をむ、う、れ世が  
 たりと思、ひつ、けて行末、の、さるあ、ゆ、う、さかあ、ふ、と、う、も、それぞとを、あ  
 り夕ま、ぐれ、松のあらし、れ、と、う、く、さ、あ、く、さ、ほ、と、ふ、き、お、ろ、し、く  
 ものゆき、いもよそよりのと、やくれ、過て物、す、と、く、名を、だ、ま、ま、ら、ぬ、山、中  
 に、を、う、せ、ん、と、して、立、の、ふ、草、本、ま、げ、つ、て、が、ん、く、た、る、そ、の、う、げ、よ、こ、お  
 き、枯木、れ、え、だ、を、見、あ、ぐ、き、を、こ、は、い、か、ま、老、若、男、女、の、ち、一、何、の、な、ま、く  
 び、こ、ま、る、に、ひ、つ、し、と、か、け、さ、る、は、只、熟、柿、れ、あ、つ、た、る、と、く、之、頼、光、ち、つ、共  
 お、く、せ、せ、い、これ、ぬ、狐、た、ぬ、き、殿、落、人、と、あ、あ、せ、つ、て、た、ま、い、ひ、を、ぬ、う、ん  
 と、な、物、う、と、ひ、げ、切、ぬ、き、か、け、ま、た、い、き、も、せ、せ、守、ま、つ、め、て、立、ぬ、ふ、時  
 又向ふの、木、か、げ、より、小山、れ、や、う、あ、る、大、男、丸、太、太、孫、と、こ、ぎ、出、す、と、く、ぬ  
 め、く、つ、て、あ、お、ま、より、頼、光、の、足、も、と、へ、ど、つ、の、と、す、い、り、有、さ、ま、は、と、ひ  
 と、き、れ、太、將、と、か、ん、む、ん、打、ぬ、斗、之、頼、光、も、の、さ、ば、ま、を、あ、こ、り、や、く、男、う

ぬかつらつき只者なふせまやうをいもがつてん、某の善光寺参けい  
 の上方者、路跟ときらし一宿すべき様もあし、近比無心千万あがらぬ  
 しが常々ぬそみた先し、金銀衣類の云ふ及ず、身よまといふるわんば  
 うこいにさめたいしも、とや〜ぬいて渡せ命斗いたけてくれんど、  
 いとせもてせうふ〜と笑ひイアラでつちめがあぢとやるよ、身が一せ  
 きれせまふのうらをくはそはまき者、いぢをつて大けがまくらんより、  
 うぬがわんぼうちしにさめたあういはいも、早くこ〜へまけだせ、渡さ  
 ぬだてをはき出さば、こりや、此首のれん中に〜へん、西のえだかひが  
 一のえだく、のぞめとつめかくれと頼光返答もまぬいせ、此程の旅  
 づかきとろ〜とねてくきんど、いとかどまかけ上り、くび二つ三つひ  
 つうんで飛ねり、日本一の枕をさんあれど、兩足をつとふみれば、も  
 たかにふしふるは有さまよて死も又あそろ〜山賊今のたままらう

ねつかよ手をかけぬらん、〜ともがけ共神武智勇の名將れ、三徳けん  
 びのぬよをされ眼もくらみうでまびき、覺へまふるひ出けるが、さそが  
 け山賊はうどあき色我十余年の今日迄、多比者お出合〜が〜どもか様  
 のぬのくばとらせ、さもあれ、身只人あらぬつ、ままらうり聞きさよ、  
 なふそこれまれぬあひ手まやとまたと、まいてぞぬりける、頼光打ま  
 せぬひまもあふん、凡此土お生有者我名をまらぬとや有、源の満仲が  
 嫡子攝津守頼光ぞと、聞より〜つと飛まきりからべを大地にすり付、  
 勿脈なや〜、さればこそ始よ、世にのねあらま見奉りい、扱ひ平れ正  
 盛、清原は右大將がさん言よてかゝるは身となりぬふよ、所こそあき  
 此所よてあひ奉るも宿世のゆえん、我のうらふべに熊竹とや山賊は張本、  
 向後一命をあげうち君よつうへ奉らん、ゆくつ取共思しめされいへか  
 ーど、思ひ入たる詞の末頼光喜色あゝめあらせ、頼も〜然らばけ

ふより主従ぞや、子孫よあかく武功を傳へ幾千代りけいと云死に、うか  
 べれ末竹と名のるべしとれぬへば有がたし、きのふ迄はをひのぎ、  
 けふよりの忝くも源氏に郎等うらべの末竹の供や、山も谷も草も木も  
 皆我君れば領内、此山にけだ物も鳥も虫も皆傍輩、うけさる首ははうバ  
 れに鳥殿へのをさみやげ、さらばくと見うへるや山路、うへるや一と  
 うむあしき谷のこゑ、山よりふして海ちりく、谷よりふして水遣し、前に  
 はうの水ぞやうくとして、月真如光をうけ、うらるには嶺松、  
 ととして風常樂の夢をやぶる刑鞭りまくちて、登むなしくさる、諫鼓、  
 音ふして、鳥おどろかすとも、ひつべし、心のむらゝ、かはらぬ共、一念  
 けまやらの鬼女とや人のみちのくのまのふの山は有りとそれバ、  
 はりひがね木曾の山、たれふは、淺間伊吹山、ひらやより、の花ぐもり、雪  
 をに赤ひて、山がつけ、樵路よりよふ花のかけやすむ、おもに、かたをか

し、月をともなふ山路おは、雪月花をもて、あそび、心のまづの目に見へぬ  
 鬼とや人たれぬと、いへ、よーあー引の山姥が山めぐりするぞくるし、  
 くるゝもとや死山かけに行くれぬひて、頼光、道あるにふみまがひ、  
 里はいづくと誰おかも東西わらず立ぬふ、侍供に末竹あふりを見廻し、  
 わきま柴うる女やすふうらの八里もはや遠からせ、くつ死やうのあ  
 ん内者は女此山の何と云ふもどれ里へ下る者道引せよといひければ、  
 是は信州あけるの山のいたゞた、侍々んれとく道もなくふもとの道と  
 て東北の、五十四里秋田の地、幾重の谷み、糸赤はをわたして橋とあし、お  
 そろしや、唐土の蜀川、天竺の流砂、葱嶺とや、かんの難所もまさるとう  
 や、北は越後、越中、れさうひ川、是も谷二つこへ、十里に余れば、けふれ中  
 思ひもよらせ、おいとーや我ががかたにど先ましたふゆへ共、いづきも  
 わか死殿たち此まばうくがそと、うの、おいやであらんと云ふせい、ふつ

しのなふぬ山人のふたゝと花とはこききん頼光うちゑまふそれの  
 さかさま、あふくまゝしきわう者共そきたこそいとひきん、行くれたる山  
 道柴くりのゑろの山姥れそをかでも、くるしうらまどののへばこつと  
 おどるくかほばせまて、扱のまづうらま山姥と見へけるか、山姥どの  
 山は住鬼女より鬼成共人あり共山よそむ女なれば、さ見ぬふもとけり  
 や、そも山姥の生所もまふ宿もなし、さ雲水をたよりまていさふぬ  
 山のおくもあふ、人間あふまどおそるれど、ある時の山柴の山ちりか  
 らうさたそけ、さと迄をくる折も有又ある時をり姫のいととたつる  
 まどの梅えぶの驚いとくりわたくし紛積れ、やどに身をおき人にやと  
 りき手間まどくさへどらぬ亂れがみ女の鬼どのとりの世をうつ  
 せみの、うらころも千せぬ万せいひの、さぬさにはるのまつてい、ま何  
 ていかふころ槌の音、こまよひく山彦も皆山姥がわざと、思ふも

見るも人ごゝる、ぼんれうあまばばだ、い有佛あれば衆生あり、衆生あれ  
 ば山姥も、あまのいなふさざるべた、都に歸りて夜がたりにせさせぬへ  
 や、夜すがらかたり参らせんといやりふ、いさきひ入にけるまだかた所  
 を、まのふ頼光を請ふ奉ま、いやくさ様にささるゝ者ならず、一夜  
 の程之軒れまたまありすべし、見せせばひとりまみの女性此方へれ  
 うまひあふ、渡世のいとあみせられかしと辭しぬへ、いやくれあむは  
 そのをにうへくもかくれあし、大將軍れはこつがらまがふ所いぬ、誠  
 や源の攝津守殿、清原の右大將平の正盛らがさんそらまて、身身をあ  
 やぶめさすらへさまよひぬふどの山のおくもかくきなし、そき共名  
 乗のひあふ、みづうらま身のうへをもかたり参らせん、定めて旅づも  
 色何をかまほもてあし、折ふし山よのこれみも皆落ててぬげ、思ひ付  
 たりつくさふいふの山お、いぐやう一えだきのふ迄有し物、是をとめて

参らせんとおもてお出ーがふり返り、必<sup>かな</sup>く奥<sup>おく</sup>の一間をのぞきぬふ奇見の  
ふ奇、追付<sup>おひつけ</sup>歸<sup>かへり</sup>ふん待<sup>まち</sup>ぬへど、いひねをふむと飛鳥<sup>とび</sup>れとく山ふかくとんで  
入<sup>いり</sup>まけり、未<sup>な</sup>武<sup>ぶ</sup>よこ手<sup>て</sup>とうつて、つくしさいふ迄<sup>いた</sup>ひ五百余里、今<sup>いま</sup>の間に歸<sup>かへり</sup>  
ふんどや、さやつがまかたいひふん始<sup>はじめ</sup>うらのみこます、君<sup>きみ</sup>の武功<sup>ぶくわう</sup>をねさ  
へんとままやうへんげのあそ所<sup>ところ</sup>、追<sup>おひ</sup>うけて討<sup>う</sup>とめんとかけ出るとやれま  
て、へんげとまつて立<sup>た</sup>さはげばうれよ心を寄<sup>よ</sup>べとる、此<sup>こゝ</sup>方<sup>かた</sup>とまづまつ  
て却<sup>かへ</sup>てさやつとたぶかし、あぶりころしにさいぢせんさもあれうれ  
が、詞<sup>ことば</sup>にまゝがひ、れくれ一間を見<sup>み</sup>せにをかんもとくれたりと、主<sup>しゅ</sup>従<sup>じゆ</sup>のぞ  
き見<sup>み</sup>ぬへばあふとさまじや、五六さいれわらんべ五たいの色<sup>いろ</sup>と朱<sup>しよ</sup>のど  
く、ねどろのうぶがみ四方<sup>しやうほう</sup>又<sup>また</sup>亂<sup>らん</sup>れ、糸<sup>いと</sup>トきとおほしく鹿<sup>か</sup>おほかまゐの玄<sup>げん</sup>  
を引<sup>ひ</sup>きたてつみかさ孫<sup>まご</sup>、木の孫<sup>まご</sup>を枕<sup>まくら</sup>ふふしる様<sup>よう</sup>誠<sup>まこと</sup>の鬼<sup>おに</sup>の子<sup>こ</sup>是<sup>こゝ</sup>あ  
めり、まゝを我<sup>われ</sup>羅<sup>ら</sup>刹<sup>せき</sup>國<sup>こく</sup>よ來<sup>き</sup>るかど身<sup>み</sup>れ毛<sup>け</sup>、いよだつ斗<sup>と</sup>、時<sup>とき</sup>とうつさずあ

るトれ女<sup>め</sup>くまどたれつてふりかたげ、かへる所<sup>ところ</sup>を頼<sup>たの</sup>光<sup>ひかり</sup>ひき丸<sup>まる</sup>をぬきと  
あし、どたどうてバひりどはづし、ちやうど死<sup>し</sup>きバはつとひらきま  
つてにふむかんバせかり、角<sup>かく</sup>の三<sup>さん</sup>ヶ月<sup>げつ</sup>雨<sup>あめ</sup>がん、寒<sup>さむ</sup>夜<sup>や</sup>のはしどか、や  
けり、いかれる面<sup>おもて</sup>にとくくとこぼる、涙<sup>なみだ</sup>ふくれあがら、うたてやあど  
づか、いやらみなき我<sup>われ</sup>君<sup>きみ</sup>よ、あだをなさんと思<sup>おも</sup>ひね共<sup>とも</sup>、汚<sup>よご</sup>たちあげにお  
どろきて自<sup>みづか</sup>性を移<sup>うつ</sup>らと、いぞや、此<sup>こゝ</sup>上<sup>かみ</sup>は力<sup>ちから</sup>あきうれの、すゝきや又<sup>また</sup>出<sup>い</sup>  
て身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>さんげやべし、我<sup>われ</sup>もどい遊<sup>あそ</sup>女<sup>め</sup>れ身<sup>み</sup>、坂<sup>さか</sup>田<sup>た</sup>の何<sup>なに</sup>がしと縁<sup>ゆかり</sup>世<sup>よ</sup>をかけ  
し契<sup>ちぎり</sup>の中<sup>なか</sup>、れつとれ父<sup>ちち</sup>を物<sup>もの</sup>部<sup>ぶ</sup>と云<sup>い</sup>者<sup>もの</sup>にうたせ、其<sup>その</sup>敵<sup>たか</sup>討<sup>う</sup>ん爲<sup>ため</sup>ありぬわくれ  
のあづさ弓<sup>ゆみ</sup>、おつとの運<sup>うん</sup>命<sup>めい</sup>つゝあくる妹<sup>いもうと</sup>よせんこさき、親<sup>おや</sup>の敵<sup>たか</sup>を討<sup>う</sup>ぬの  
まか其<sup>その</sup>と故<sup>ゆゑ</sup>に源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>の大<sup>だい</sup>將<sup>しやう</sup>、漂<sup>ひょう</sup>泊<sup>ぱく</sup>の浮<sup>う</sup>身<sup>み</sup>と成<sup>な</sup>ぬふ、今<sup>いま</sup>生<sup>な</sup>れ此<sup>こゝ</sup>身<sup>み</sup>よて此<sup>こゝ</sup>戀<sup>こゝろ</sup>憤<sup>ふん</sup>  
はれがたく、腹<sup>はら</sup>か死<sup>し</sup>切<sup>き</sup>てこんとく汝<sup>なんぢ</sup>がさいよやどり、日<sup>ひ</sup>本<sup>ほん</sup>無<sup>な</sup>双<sup>ふた</sup>れ大<sup>だい</sup>力<sup>ちから</sup>一<sup>いつ</sup>騎<sup>き</sup>  
當<sup>あた</sup>千<sup>せん</sup>の男<sup>おとこ</sup>子<sup>こ</sup>と生<sup>な</sup>れ、敵<sup>たか</sup>れ余<sup>あま</sup>類<sup>るい</sup>をやるぼさんと天<sup>あま</sup>ようはたへ地<sup>ち</sup>あさけび、

ちかひのやいばふたりたりし、そきより我身もたゝるらぬ子をもち月  
 のかけぬりく、人倫とみまし山もこもまば、いつれまにうの山めぐり一  
 念の角そばだち、眼も光る邪正一如と見る時、鬼にもあらず人にもあ  
 らず名の山姥が山めぐり、春とまよし野初瀬山高間山は白くへに、ま  
 がふかそみもそきかどて花を尋て山めぐり、秋とさやけた空の色、あ  
 らぬうげもさぶまきや、をを捨山の、名よめで、月見るうたふと、山めぐ  
 り冬とさへ行ひつが嶽、こしれまら山まぐれ行雲をおよして雲に乗、雪  
 をさそひて山めぐりめぐり、て我君に、めぐりわひしも我妻の念力  
 通力神力よて、渡邊の綱うするの定光只今是へまねくべし、あをを我子  
 をもふだいた家人と思召、敵にせいばつの馬は口をも取あふを、父が  
 一この素懐をとげ母が鬼女にくげんをたぐれ、成佛とくぶつうたがひ  
 ち二世れくるし、み助かるも、只大將のひまひと角をかたふけ手を合

せひれふて、こそ泣いたれ、かゝる所へ綱定光木草を一分、我君是よ  
 座に、兩人こんや信濃路を通りし、たぐいふ共あく源は頼光と、此山  
 にあきたああの谷のこゑよと手を取て引がとく覺へず是迄参りし  
 と申上れば頼光鬼女は神變のしくあたり、さるの思ひをるしぬふ、扱  
 兩人を末武よ引合せ、此上の女が望ま任せ汝が一子に主従のけい約せ  
 ん是へめせとのめへば母と悦び、快童丸くと呼ばれ、あいとこたへ  
 てづいと出、どつかとさしたる、かやれ色、あふか、様ゆればどこのおち  
 様まや、まやげもらはふ嬉しいと、手をさいて悦び、あいたやう有て  
 すさまじた、左ながらあいせん明王は笑ひがほかどあやまたる、母立よ  
 つて、慮外者、ゆなたと常云聞せし源は頼光様けふよりおとが殿様は  
 奉公せい出しままよと、すまやいれふとをしへる、とつと手をつき一  
 禮し、随分奉公せいお入、敵の首いくつでも引ぬいて上ままよ追と、さだ見

へたる廣言くわうげんも滂悦ほうえつは淺かあす母重もぢて孫のがんくつに熊くまのまゝを  
 追入置、折をる力をためし見れば、滂ほうんひへあのとく引ひさ死しひ、是れ目見  
 へのまゝるゝ相撲すま所望と云ければ、ずんと立て岩屋の口に立たるばん  
 石、かるくど取とてなげのけ兩手をひるげつゝ立所に内よりあふ熊と  
 んで出るをどつこい任せとまつかとだく、熊とゝもせず孫ぢ付んとす  
 き共いつかなうごかばこそ、かみ付かみばこぢとあゝ組付くみををいふせ、う  
 めたたるれどぶへを二、三ふたたき付くひるむ所を取ておさへかた足何  
 うんでくるくくく、二三間ふたのつととあけ、くたひさふちゝがれみたい  
 か、様と母が膝ひざにぞもゝまける、頼光甚た喜悦有、ためゝあは強つよ力母が  
 子あて有あよな、則すな只今冠かぶさせ坂田さかは金時かねときと名付、四王天しやうおうてんを表ひし  
 定光末武綱金時、頼光が家は四天王しやうおうてん八蠻はつばんを切きるびけ、源氏の威光ゐかう四  
 ういよてらさんまゝるしぞと、各おのざゝめたひひぬ綱定光詞をそるへ、君

のまゝるゝめされずや、近江の國おんうかけ山に悪鬼あくおにすんで國民とあや  
 まし、折をるの都がさへもゆらはるゝ故、諸國の武士ぶしも悪鬼退治あくおにたいぢせんと  
 下るといへ共ともか請こ中者なかつなもあし、武勇ぶゆうも長せしものゝふ鬼神おにたいぢ有あり  
 抜ぬいての勳功勳賞望くんこうくんしょうぼうも任せらるべし、どの高札所たかざしに立たられたり、此い  
 死しはひに悪鬼あくおにたいぢ覺おぼし死し立たぬへと、すゝめやせば頼光頼光をまこそ武  
 運うんひくくべきすいろう、多くは人數無用にんずむじゆう之主しゆ徒五人、山つゝ死しにわたり入  
 て、鬼神おにが自在じざいに身を變かじ千騎せんきとあふむ千騎せんきをうち、万騎まんきとなふ万騎まんき  
 をうち天下太平てんかたいへいは忠義ちゆうぎをあらはし、敵を亡なぼを前表ぜんひょうはやうち立たとすゝ  
 みぬへを、金時かねとき悦えつび、鬼神おにのいぢ面白おもしろうらふ、是人このひとも此金時このかねときの、生所なまところもま  
 らず宿しゆくもあき山姥やまばは子こあれば、さん所ところも山やまうふ屋やも山やま、そだつ所ところも山やまを  
 をむ山道の先陳せんぢん仕しると、まつさきよ立て出でたれを、出でたしゝく、心こころに  
 うゝるまゝのあゝ母ははのまゝよりけまやうの身み、有あ共ともあゝともかげるふの



うげ身にそふて守りの神、是迄ぞ金時、是迄ぞ我君、いとまやて歸り山の、  
 とね、にいざよふ月かど見きを、まぶ中そらおくれぬ日、うげのくれしも  
 通力、いかりと見へしも、まゝなるをとあれぬも、うまうの雲水、あがれく  
 く谷よ音、ゆりてずるに、こゑある、風にたえく、嵐もちりく、ちりつも  
 つく山姥とあれる、鬼女が有さま見るや、くどとねまかたりたに、ひ  
 っきて今迄こゝに有よと見へ、が山また山、お山めぐり、山また山に山  
 めぐりして行るも、まらせおりにけり

第五

瑤臺霜滿り、一聲の立鶴空よあく、巴峽秋深し、五夜は哀猿月よさけふ、物  
 ぞさまじき山路りあ、うくて頼光四天王を相具し、鳥も通ぬ、ぬうかけ  
 山屏風を立たるとく成、悪所をたふは、お主従五騎木は、終り取付いとま  
 をつたひ、足にまかせて行先も次第く、に道くらく、山共谷共まれさま

を、どある木は、終りこしうちかけまをらくやすらひぬひける、頼光仰有  
 ける、いり程けいした山中を、とや二三里も過ぬを、ど何のふしきあきと  
 の、必定世俗の虚説あ、うん、實否とよ、い重て取まき討取べし、いざかい  
 ぢんせん人よといとせも、ててまあらおそろしや、まくらうは、数万のこゑ  
 有てふしきなきやふしきおまや、思ひまらせん思ひま色、あい、くどつ  
 と笑ふこゑ波の打くるとく、之、時に向ふは、松がえよ五尺余りの女のく  
 び、おねぐるよ色白く眼は光りの、やくと、川邊は氷一たんよ朱となが  
 せしがとくよ、てにつとよしむむかやせの身の毛も、よだつ斗、末武  
 す、み出よう、くどふもく、鬼は娘おゆげんも、ト此末武めが思ひは  
 さね、八まん一夜のお情あれ、心中づく、あら後共いとを、今目の前にとち  
 けくのちびたれ石と我戀と、おもき思ひをくらべよと大石を、あいやつ  
 どかた手につうんでなげつくを、變化の首の、其ま、にかたけを、様よ

どうせよなる時、山河をえんとらしてらいでん稲妻おびた、敷二丈余り、此悪鬼のかたらくのゑんをふら、枯木をあげけ、石上よつ、立まうぞくだつをぐん、がつとよむるこゑよこ、山かげ谷かげ岩かげ、杉の木は間よさんらんし、あまよれ、なんぞく一度にせつとあめいでり、る、さまつたりと頼光ひげ切をさしうざし、數万れ中へ亂き入おめ、死さんでた、かひなる通力まさい、變化たよ名劍のとくよ恐きたいさん、得るびら、せにたる、大將破顔鬼いかりをな、頼光をめぐけ飛でう、ると金時おもてに立ふさがり、させぬ、あやのわういがままんう、そつち、此かやがゆのけれをさ、鏡もまつかいな、う、様よりの、ゆり、此力のあんをい見よと、夕日にか、やくもまぢをのいづれとをさ、とくれあむの、兩手をかけてくんだき共、二丈お余る鬼神のそがた二尺よた、ぬ金時う、ひさふ、迄もと、かむるを幾年ふり、桶のねと、

まどひたる朝がほの朝日よ、死ゆる命れ程、ゆやうくも又ふて死之、鬼神いらつてうた手とのべ金時が、どうぼねつかんでかる、とさ、上、まぢんよなきとなげ付れをちうよてひふり、とと糸返り、おちさまよ鬼神の兩足ひとつにつかんで、おがひまめ、大地よとらと打つけ、おたわがるをふ、またし打ふせ、糸ぢふせ、と、死ふせ馬乗にまつかと乗、一い死をつとついたり、い悪鬼よまさりしい、死はひげよ山姥の、子息いやくどつとぞ、母光よける、渡邊末武定光なんと我も、ととせあつまり千筋、あのをぞかけたりける、こ、ちよ、いさぎよし、只此ま、に都へひげ、がてんまやまつりせ金時が、どうよまふと死大綱と、まつかとつうんで、やるぞゑ、本づる中づる木やりでせ、い、てんまはひよゑい、ゑい、く、てんまの通力と、と、く亡ぼしてかいぢん、有こそ、めでさけ、かくててい、とよ、いからうけ山は變化は討手、諸卿せんぎ有所へ大あごん

兼冬公さんだいあり、扱も某がむこ源に頼光勅宣は高札に任せ江州  
 うかけ山にわけ入、變化をいけせり入落仕ていへ共、勅勘は身を憚り  
 某を以奏問仕、早く候臣は實否をたゞさき、賞罰を願ひ奉るをれく  
 と有ければ、金時が赤は取よて三人四方を取かこみ、底上にひつすへた  
 る鬼神のいりりおめくこゑ、宮中になり渡り帝を始月卿雲客宮女上下  
 け男女共恐れれたの、く斗之、關白忠平涉と近く出ぬひ、變化たいぢれ  
 武功ゑいかん淺うす、此恩賞によつて頼光出仕ゆめん有、とやく鬼  
 神のかうべを切渡河はし付よ、まづひべいとれ繪言とて詞もいまだを  
 いらぬに、渡邊ぬだ々高よなりからく、と笑ひ、この一天の君の勅諭と  
 も覺ぬ物かな、もとよりのとあき頼光が涉免有との何のと、鬼神たい  
 ぢの恩賞の望次第どの高札によつて、我と一命と投打鬼神といけど  
 りいへ共、いまだ洛中よ平に正盛と云恐る、け鬼神すんで、とがあき者

をざん、國土をさひがし、さやつを我にぬいつく此鬼神と一所お  
 たいぢ仕らん、是第一の望と憚りあくぞすける、關白殿を始有あふ諸  
 卿色とそん、おせいさかんは正盛たどへいか成あやまり有共、ちうせ  
 んと叶ひがた、何おくも外の義を望むべと有ければ、定光を始末竹  
 金時口よ、かなぬ望をまさく、とすてもむやくの至り、此方は無心  
 ずさぬか、そのつちの取用も承ふぬ、此談合さふまつともとへもどし、  
 此鬼神のなを切はど死庭上おとち、我もはらか死やふりどもに  
 惡鬼と侮らぬれ、さんけいのおろか日本國よ、あたをあさんど、すでああひ  
 ききらんとすけい、まやう雲客あらこのや、やれまて渡邊とさうまやる  
 あ、定光殿末竹殿、金時とやらよい子、お頼むあひとく、鬼をとあして  
 たまる物かと、涉簾や死ちやうに身とちやめふるひ、あひひける、  
 關白道理にふくしぬひ、そらもん衆、判ちからなく、けびいし勅をう

ふりて正盛になつたかけ、四天王に渡さるゝこの有がたしとひつふせ、  
 一人めかたづけたりとて、もれどに清原は右大將高藤と云、大悪人の  
 鬼神の種、あつたふんと、言上すれと諸卿目と目をさつと見合せ、かた  
 づをれんでおかしきと、關白殿まをひと、悉くも高藤の女院は、弟  
 いかよさいくの、おれを、とて若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、  
 し、此義をひて、いかよさいくの、おれを、とて若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、  
 どの中さす、さすを鬼に、おれを、とて若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、  
 合せふ綱殿と、おれを、とて若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、  
 成りつと共、おれを、とて若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、  
 又て大石をつまぎんとする、又似たり、早く其場を立れくべしと、あさ  
 わらつて立たりける、綱殿、さすすかけ出高藤が、もろひざかいてどう  
 とひつふせ、ひつふと、おれを、とて若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、若大將、

状、及せと高手小手、まどいましめたり、時をうつさず、まうと中なぶん  
 兼冬卿、頼光と誘引、參内、おれば、いかに甚うるわしく、源氏の本領も  
 どのとく、鎮守府の將、ぐん、又任せられ、兼冬の娘、おもたか、姫四位の女官  
 又補せられ、多祝言の吉日、迄勅諭有、ど有がたき、扱、右大將の、とい所、いさ  
 かいが、嶋へ、正盛の鬼神、ととも、もちうすべ、との論言、この有がた、い  
 それと、からへ承ると、正盛を引出し、首ちう、又打落し、残る鬼神の四天王  
 が、あふり、ころ、の、手玉、つと、定光、末武、兩足、と、れ、バ、金時、つた、手、に、つ、の、を  
 持、ゑ、い、く、を、ゑ、して、引程、ま、なん、あ、く、首、を、ね、ち、切、て、左、右、へ、さ、つ、と、の、い  
 ても、の、か、ぬ、い、ふ、う、ふ、主、従、一、門、一、家、え、ん、者、ま、ん、る、い、ゆ、た、か、あ、る、あ、が、れ  
 を、く、んで、源、の、氏、も、と、ん、じ、や、う、國、之、ん、じ、や、う、五、あ、く、ふ、よ、う、の、民、と、ん  
 じ、や、う、ほ、う、ら、い、國、の、あ、き、つ、島、を、ま、さ、る、多、代、と、ぞ、祝、ひ、け、る

明治十四年十一月十日第一册出板御届  
同 十五年四月廿九日第二册出板御届  
同 二十一年六月 再板合本

東京府平民

編輯兼出版人

丸 屋 善 七

神田區宮本町五番地

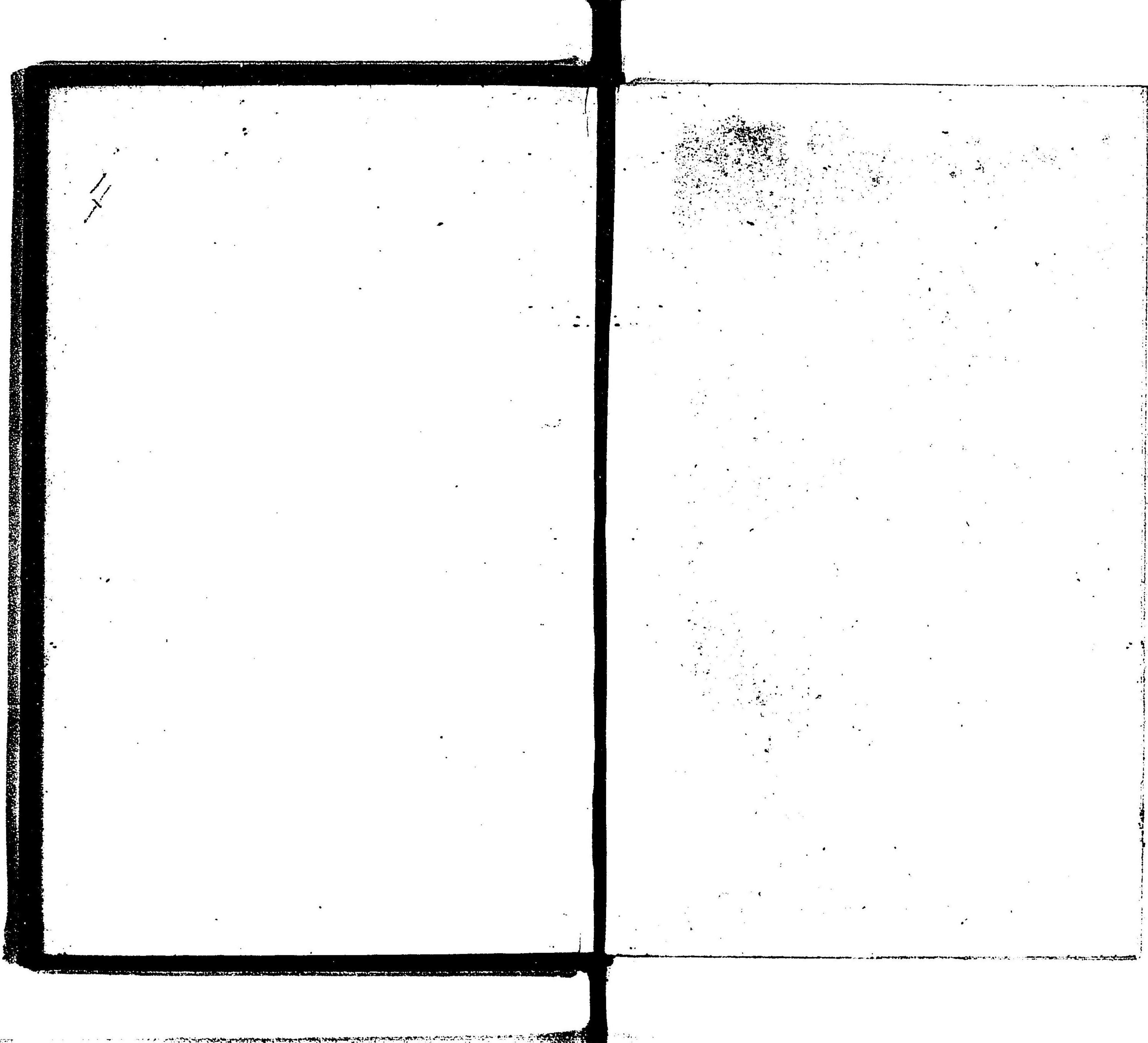
發行所

叢

書

閣

神田區宮本町五番地





912.4

Ti238t10

088307-000-5

912.4-Ti238t10

近松著作全書

叢書閣

M21

DBI-0145





